

もし、周りの人がDVで悩んでいたら...

DV(ドメスティック・バイオレンス)は、配偶者など親密な関係にある者からふるわれる暴力のことで、なぐる・けるなどの「身体的暴力」をはじめ「精神的暴力」、「性的暴力」、「経済的暴力」があり、多くは何種類かの暴力が重なって起こります。また、DVは決して大人だけの問題ではなく、高校生や大学生の男女間の交際でも、同様の暴力が起きており、「デートDV」と呼ばれています。

DV被害者の多くは女性であり、「恥ずかしくて誰にも言えない」、「自分さえ我慢すればなんとかなる」などの理由から、その半数以上が相談しない(できなかった)と答えています。



女性に対する暴力根絶のためのシンボルマーク

「二次的被害」を起こさないために!

もし、あなたが友人や知人からDV被害について相談されたら、話を最後までしっかり聞いてあげましょう。暴力は、決して許されるものではありません。暴力を受けている被害者(友人・知人)が悪いのでありません。

被害者は、勇気をもってあなたに相談をしているのです。被害者の立場になって、恐怖や不安を理解し、心ない言動によって、被害者がさらに傷つくことのないようにしましょう。

また、話の内容が加害者に届くと、暴力がエスカレートする恐れがありますので、他の人へ話してはいけません。

そして、被害者には、専門の相談機関(下記「女性の悩み電話相談」)を紹介してください。

してはいけません

こんな対応は、友人・知人(被害者)が更に悩んでしまいます。

- ◆ 話を最後まで聞かない。
- ◆ 結論を急ぐ。または自分の考えを押し付ける。
- ◆ 「あなたにも悪いところがある」「のろけているの?」など、話を真剣に聞かない。

DV(デートDV)に限らず夫婦・親子の問題・職場のことなどの相談に応じています。

パートナーシップさいたま 女性の悩み電話相談 TEL.048-643-5813

●月～金曜日:午前10時～午後8時 ●土・日・祝:午前10時～午後4時 ※相談は無料。秘密は厳守します。

INFORMATION

「女性の悩み電話相談」って?

女性の悩み相談に関するよくいただくご質問です。

Q 誰が電話にでるのですか?
A 専門の女性相談員が電話で相談に応じています。

Q どのような相談があるのですか?
A 電話相談には夫や子ども、親戚や嫁姑問題、隣人、職場、友人などとの人間関係や心の悩み、自身の生き方、DVなどとても幅広い内容が寄せられます。悩みを胸にしまいこまずに言葉にして話すことは、自身の考えや気持ちの整理をするきっかけともなります。

悩みを解決する糸口を
あなたと一緒に考えます

Q 悩みと言えるかどうかわからないのですが...相談しても平気ですか?
A 一人で抱え込まずに相談してください。たとえ些細なことだとしても、あなたが生きづらいと感じたことなのですから。いつでもあなたをお待ちしています。

Q どうして電話での相談なんですか?
A 電話であればどこからでも気軽に相談ができます。その際、名前もお聞きしませんし、相談員も名乗りません。相談は30分程度を目安にしています。内容が漏れることはありませんので安心して相談してください。

仕事と生活 切り替えの早さで チャレンジし続けます



森尾 由美さん

PROFILE 【もりお・ゆみ】

1966年生まれ。埼玉県出身。1982年、テレビドラマ「ねらわれた学園」でデビュー。ドラマ、舞台、声優など、幅広く活躍。1992年に結婚。2004年から米国ロサンゼルスに在住。トークバラエティ「はやく起きた朝は...」(フジテレビ)では長くレギュラーをつとめ、毎年恒例の舞台版も好評を得ている。また、10年間、11シリーズに及んだテレビドラマ「大好き!五つ子」(TBS)では次作が期待される。

輝き続ける理由
芸能界にデビューして30年、結婚して19年目を迎える森尾さん。仕事ではテレビドラマやバラエティ番組などで人気を博し、プライベートにおいては2人の娘さんが既に17歳と12歳になっています。
仕事と生活を両立させながら、デビュー当時と変わらない輝きを持ち続けていられるのはどうしてなのか。

芸能人だから、と片づけるにはいかない。子育て真っ最中に、言葉もわからない米国に移り住み、日本と行き来しながら仕事と生活を両立している。仕事で帰国する際には、外食を嫌う娘さん達のために3日間分の食事を作り、冷凍してくるぞうだ。
「切り替えが早いタイプなんです。米国では家族のために、家事にイそしんでます。得意ではありませんが...でも、そういう生活を続けていると『私

の存在っていったい何?』という疑問が頭をよぎります。そんな時、『私は仕事がある』って気持ちを切り替えるんです。自分はその番組に必要とされていると思うと元気が出ます。仕事ではプレッシャーもあり責任も問われますが、達成感がありますね」
遠距離結婚から渡米への決断
海外コーディネーターの夫とは米国で出会った。米国を拠点に多忙を極める夫と、既に日本でレギュラーの仕事を確認している森尾さん。
長女、次女を出産したが、早期に仕事に復帰。幼少期の子育ては、実家のサポートを受けながら乗りきった。
「10年経っても夫の状況は変わらず、娘たちはどんどん成長していくわけですから、父親離れをしよう前に、夫に父親としての自覚を持ってもらうとともに、家族の一員という実感をみんなでも共有しようと米国行きを決断しました」
あれから6年、少々変則的とはいえ、やはり家族が一緒に暮らす生活が家族関係に良い結果をもたらしている。
ユニークなライフスタイルと家族の絆

森尾さんは現在、3週間ごとに2泊4日の日程で帰国してテレビ番組の収録などをこなすのがここ数年のパターン。
「仕事と生活のバランスを図るうえでまず大切なのは、夫との仕事の情報交換とスケジュール調整。娘たちのことを考え、必ずどちらかが家にいるようにします。夫婦ともども出張が多く不規則な仕事ですが、早めに調整すれば、キャンプなどの計画も立てやすい。スポーツや旅行など利用し、食事を家族全員でとりながらスポーツ観戦をする。一般の家庭に比べて家族全員が揃う日が少ない反面、揃った時には深く関わり合っているのが我が家のスタイルです」
これからもチャレンジ
「そろそろ子育ても一段落するので、長期の舞台に挑戦するなど、再び積極的に活動したいと考えています」
互いの仕事を尊重し合い、遠距離結婚も、別居での子育ても、米国への転居も必然的な手だてとして受け入れ、その都度、最適な家族関係を構築してきた森尾さん。柔軟な思考で、これからもチャレンジを続けていくことでしょう。

※ケータリング:顧客の指定する元に出向いて食事を配膳、提供するサービスのこと